

現代中国社会における「宗教ブーム」に関する一考察

金 勲 Xun JIN

A Study on the Religious Fever in Modern China

はじめに

宗教とは人類歴史的産物である。宗教は意識形態であるとともに社会現象であり、文化現象でもある。人類が精神生活を始めてから今日に至るまで、宗教は精神生活にかかざるを得ない要素としてわれわれの生活に伴ってきたからである。それと同時に宗教は超歴史的存在でもある。超歴史的存在という場合、人間の基本精神欲求、心理欲求に応じて生まれた宗教は、その中の基本要素はもはや時空を超え、人類文明の普遍的価値の一部となって影響を与えているからである。そうはいつても、宗教という存在は、特定の時代、特定の民族、集団あるいは個人の心理的欲求に応じて役割を果すので、その表現は多様である。特に、第二次世界大戦後に世界各地で発生した「新宗教運動」及び六十年代からアメリカ、ヨーロッパ、日本など経済発達国家と地域で活躍した新宗教はその数多く、複雑で、社会の民衆の精神生活にいろいろな影響を及ぼしてきたということは、現実上、人間の心の問題が大きな社会問題となっているという証拠でもあろう。これはわれわれが歴史を顧みるときによく感じるメッセージである。冷静な歴史、現実認識なしに人類将来に何をどう期待していいか、疑問を抱えざるを得ない。物質生活の豊かさとともに、人類の文明のレベルを高めようするならば、人間の健全な精神生活、すなわち、心の道徳レベルを高めなければならない。これこそ二十一世紀われわれが抱えている一番大きな課題ではなかろうか。

本文は、こういう歴史意識と現実をもとに中国内外の注目を受けている二十世紀八十年代から始まった中国社会の「宗教ブーム」を世界宗教状況の大背景の中で考察することにする。

一. 現代中国社会の宗教状況

中国政府が二〇〇一年に実施した第五回目国勢調査の公式発表による総人口は12.9億人である。その中で、現存する五大宗教（仏教、道教、カトリック、キリスト教、イスラム教）の信仰人数は一億を超えている。すなわち、全人口の一分割が宗教信仰を持っているということになる。中国は多民族国家で、全人口の92%は漢族、ほかの五十五の少数民族が8%を占めている。五十五の少数民族の中で、全民族をあげ信仰生活をする少数民族は二十二民族ある。それも地理的に西南、西北地域に集中している。それでは、上述の人口、民族と五大宗教との関係を中心に現状を紹介しておく。

まず、中国の主な伝統宗教の一つである仏教の場合、三大語系（漢語系、チベット系、パリ語系）に分けて考察してみると、漢語系仏教は漢族中心に展開、ほかのチベット語仏教、パリ語仏教は信仰民族と地域が全部少数民族地域であることがわかる。その中で、チベット語系仏教は中国西部を中心に、チベット族、モンゴル族、土族、裕固族、納西族、普米族、門巴族などで、信仰人数は約七百万人である。パリ語系仏教は中国西南地域を中心にタイ族、布朗族、徳昂族、瓦族、阿昌族等で信仰人数は百五十万人である。したがって、少数民族地域だけでも仏教信仰者数が八百五十万人に達する。仏教の根深い漢族地域はその分布が広く、寺院による厳しい登録制度がないので、その数は正確に把握できない状況である。中国仏教の出家者で、僧尼は十七万人あまりで、現存寺院は9500座である。そして全国各地に仏学院（大学レベル）が十四ヶ所設立されている。

次に、中国本土出身の道教は、その信仰者は漢族中心で、道士、道姑は六千人あまりで、宮観は各地に600座現存している。道教は主に全真道と正一道二派にわかれて信仰されているが、その信仰者の大部分が農村に分布、そして民

間信仰と混ざっているので信仰者数の正確な把握はもっと難しい状況である。民間信仰者も合わせて道教信仰者数は一億八千万人に近いという統計数も出ている。（九十年）

イスラム教もその分布が広く、信仰者数も少なくない。イスラム教は主に西北地域を中心に十ヶ少数民族が信仰している。例えば、回族、ウイグル族、ハサク族、ウズベク族、タタル族、タジク族、カルカズ族、東郷族、サラ族、保安族などであって、約千七百万人に達する。他に、モンゴル族、チベット族、白族、タイ族の一部分もイスラム教を信仰している。その中、阿訇は約四万人で、清真寺は約2.6万座ある。そして、全国各地に経学院を九ヶ所開いている。

カトリック教信仰者は主に東部沿海地域に多く、約三百八十万人で、その中神職者は約二千七百人で、教堂は4000座ある。そして、全国各地に神学院を11ヶ所と修女院を10ヶ所持っている。

キリスト教も主に東部を中心に信仰者が集中しているが、信仰者数は約一千万人で、その中牧師五千人、教堂は8000座で、小規模教堂は2万座以上あると予測される。キリスト教は全国各地に神学院を13ヶ所持っている。

カトリック教とキリスト教は近年になって信仰者数が大幅増えて実際の統計数よりもっと多いと思われる。そして、健身目的で気功修練の影響による仏教、道教信徒数も増えている。これに関しては後文で詳しく紹介する。

もちろん、上述の五大宗教以外にも地域あるいは個人による民間信仰がないわけではない。例えば、孔子、孟子のような聖人に対する個人崇拜や歴史上伝説、文学作品などの特定人物を崇拜対象とした活動なども少なくない。

二. 宗教ブーム形成の背景

上で紹介した五大宗教は歴史上中国社会、文化に深い影響を与えた規模の大きいいわゆる伝統宗教である。この五大宗教は今日に至るまで中国社会の宗教信仰においてそれなりの位置を占め、社会に有益な役割を果たしている。

ところが、二十世紀八十年代から中国一般民衆の中で宗教に対する関心が高まり、それがいわゆる「宗教ブーム」にまで広がり、無視できない社会現象と

なった。それでは、なぜ二十世紀八十年から中国社会で宗教ブームが発生したのだろうか。次に、その現実状況と歴史的原因を分析することにする。

本論に入る前に、宗教本質に対する一般的理解を釈明する必要がある。宗教存在の根源性と人類歴史及び文化との関係に対する理解は「宗教ブーム」という社会現象を説明する前提になると思うからである。

宗教信仰は人類の基本的精神欲求と心理需要である。人間の人生には未来に対する未知数が多いため、内面的に将来に対して不安を持つ時が多い。その中で、自分の弱小を感じた時には「全知全能」の神様に対する依頼感が生じる。こういう人類の依頼感こそ宗教存在の深刻な精神的且つ心理的根源であろう。

宗教は人類に究極的な慰めを与える役割を果たす。人生は有限であるが、人間たちの生に対する欲求は無限である。それでも生老病死から逃れないのが人生の現実である。宗教は莊嚴浄土、天国等の存在を強調することによって、人々を死の恐れから慰めてくれる。すなわち、信徒たちに死後の彼岸に対する存在を認めさせ、憧れをもつことによって死に対する恐れから解放させようとするのである。

宗教は信仰生活において倫理道德を信徒に要求する。宗教倫理道德はその完璧性を強調するため、人間生活に精神的追求の理想的目標を設定し、心理的に安定させ、生に対する希望と満足感をもたらしてくれる。伝統宗教のこれらの徳目は人類文明の主な内容の一つになっている。例えば、真、善、美、愛、平和などが宗教倫理の重要な道德概念である。そして宗教は人間の審美要求をある程度満足してくれる。これは宗教の芸術、文学作品、建築などを通じて、人生の内容を豊かにし、情感的満足をもたらしてくれる。こういう道德価値や審美享受は人類文明にかかざる要素となっていることは言うまでもないだろう。

古代四大文明の一つを代表する中国は、こういう価値を積極的に創造、吸収、強調してきた。ところが、中国現代史上文化破壊の大革命が起こったことは周知のことである。二十世紀八十年代と云えば、「文化大革命」が終わってまもない時期である。十年にわたる「文革」はあらゆる分野に破滅的な結果を残した。特に、人々の精神生活は理性を失い、絶望的境地にまで至った。改革開放政策は民衆に思想開放を呼びかけ、経済成長を中心とする新しい社会発展を遂

げようとしている。これは中国人たちが何十年も期待した政策であった。こういう割に自由な雰囲気の中で、悪夢から目が覚めたばかりの中国民衆は新しい一步を踏み出さなければならない。そこで、あいついて「文化ブーム」、「商売ブーム」、「出国ブーム」、「下海ブーム」（公職を辞して商売に携わること）が現れ、社会は激動し始めた。その中の一つがいわゆる「宗教ブーム」であった。

統計によると、中国の宗教信仰者の中で7割～8割は改革開放以後、入教した信徒である。二十世紀八十年代から始まった「文化ブーム」現象の一つとして、宗教関係の書籍も大量に出版された。例えば、『聖書物語』、『コラン物語』、『仏経物語』等の簡易な書籍から經典に至るまで一気にベストセラーになったのである。その中で『聖書物語』だけでも100万冊以上売れたという。

そして、宗教活動場所を訪れる人も急増している。仏教の寺刹や道教の宮観は景色のいい観光名所の役割を兼ねているのでいうまでもなく、都会の教会を訪れる人も増えている。一九九六年のクリスマスに北京市中心に位置する西什庫教堂だけでも一日に四万人が訪れたという。その中で、信教者は2割に過ぎなく、8割は非信仰者であるだけでなく、その中の3分の1は青年層だったことに注目しなければならない。言い換えると、その中の8割はいわゆる「望教者」と呼ばれる人たちである。

文革時代までは徹底的に禁止されていた宗教のシンボリックな文物も一時人気物になりよく売れている。例えば、十字架、菩薩像、財神像、線香などの生産者に注文が殺到したという。

三. 宗教ブーム形成の原因

これまで宗教や信仰は人々の心の内に場所を占め、安寧の支えをなすものであって、本来世の中を賑わすようなものではないという認識が一般的であった。しかし、このような宗教ブームが発生したにはそれなりの原因があるに違いない。まず、客観的原因として改革開放政策すなわち思想解放による経済活動の活性化と割に自由で寛容な文化政策による生活方式の自由と信仰の多元化であろう。改革開放とは、国内における計画経済体制を市場経済体制に転換させる

ことによって所得個人所有が認められ、人々は個人の価値実現に向け選択の多様が可能になった。対外的には外国との経済、文化交流活動が活発に行われ、人々はいろいろな新しい生活様式と文化、経済価値間に接触して、人生の内容が豊かになり、特に精神生活で多様性を見せるようになったのである。これは中国社会における歴史的な進歩であって、肯定すべきことであろう。

次に、これまでの安易な生活から競争社会に転換する中で、不安、緊張、悩みが生じ、それを解決する方法の一つとして教会や寺刹のような割に安易と思われる場所を求める人が多くなった。そして、市場経済による経済活動の中で人々のこういう心理に応じて金銭目的で行われる宗教神秘性を持つ商品、占い、求神など伝統文化の中で迷信として隠れていたものが甦った。例えば、観光地などで宗教関係の美術品を商品として大量に販売したり、観光客に宗教関係経典や一般書を配布したりしている。

そして、外来文化の影響も無視できない要素の一つであろう。特に、青年たちの中には西洋の科学技術とともに西洋の思想、文化、倫理道徳、価値観の影響が大きい。その中で、外資企業や合作企業で働く若者たちに対する影響はもっと大きい。

思想開放の政治的雰囲気の中で伝統宗教の活躍も宗教ブーム形成の大きな要因であろう。伝統宗教の世俗化は世界的な潮流になっている。伝統宗教は現世否定の絶対的価値への保守的な枠を打ち破って積極的に社会事業に参与し、時代発展潮流に順応して、人間性をもっと尊重し、世俗生活は無視しない道を選び始めたのである。「人間仏教」の提唱、カトリックの現代化に向けての改革などがそれである。また、宗教間の対話、コミュニケーションも積極的に行われ、伝統宗教の平和で、開放性を積極的にアピールするなどが特徴的である。

ほかに、いろいろな名目のもとの準宗教活動、例えば気功修練団体や「特異機能」者などの影響も無視できない側面である。そして、中国改革開放政策による文化交流の中で海外新宗教の中国内での活動も青年たちに影響を及ぼしている。

四. 宗教ブームの問題点

上述したように中国社会における宗教ブームは中国の特定な歴史段階における現実状況による民衆一部分の精神状況を反映したものではあるが、グローバル化が進むによる価値多元化の文脈の中でもっと広い世界宗教状況から考察して見ると決して個別的現象でもないようである。

日本の宗教史上にも「宗教ブーム」という言葉がよく用いられている。たとえば、幕末維新期の第一次宗教ブーム、大正期ないし昭和初期から敗戦後の第二次宗教ブーム及び七十年代半ば以後の第三次宗教ブーム、そして八十年代から九十年代にかけての宗教ブームなどそれぞれ日本歴史上日本人の精神状況がある程度反映している。「ブーム」という言葉は流行として読み取る人も少なくないかもしれないが、特に宗教ブームの場合、それなりの真意味を内包していることを忘れてはいけないと思う。日本の八十年代から九十年代にかけての宗教ブームはオウム真理教事件をもたらす結果になったし、その後のライフ・スペース (life space) 事件も大騒ぎになったことを覚えているだろう。

一九七八年十一月十八日、アメリカの「人民聖殿教 (The people's Temple)」の九百人集団自殺事件、「天堂の門 (Heaven's Gate)」による三十九人の集団自殺、ヨーロッパで起こった「太陽聖殿教 (The order of the solar Temple)」のフランス、スイス、カナダ各地での七十人以上の集団自殺事件など全部宗教を名乗った事件であった。

二十世紀八十年代に始まった中国宗教ブームも社会的に無視できない事件を招く結果になった。たとえば、河南省などで流行した「呼喊派」、陝西省、四川省、湖北省等広い地域で活動した「門徒会」、安徽省の「被立王」、湖南省の「主神教」及び今日に至るまで千七百人の死者を出した「法輪功」などいずれも宗教ブームに乗って活躍し、社会に大きな被害をもたらしたのである。このような宗教の名を借りて、社会に登場するカルトの背景には「宗教ブーム」という大きな流れがあるのである。もちろん、ここで健全な新宗教や宗教信仰とカルトを区別して取り扱わなければならない。現代カルトの特徴と表現は様々

ではあるが、分析して見ると次のような傾向をもっていると思われる。

教主のカリスマ的な奇跡論、すなわち伝説や現代科学的手段を借りて、超人間的神力の所持者として現れるのが多い。幸福論において、現実を離れた幸福追求を信徒に強要する。脱会論でも健全な宗教の場合は、入会と脱会が自由であるのに対し、一度入会すると脱会を許さないどころか厳しい手段をもっと罰するのである。そこで、もっと注意すべき問題は終末論である。終末思想は現世を徹底的に否定する上で、教主のカリスマ的奇跡論に結びつけ、信徒を魅了する手段として使われ、また脱会不可の根拠としても利用されるからである。こういう人生の奇跡を求め、空想の中にしか存在しない幸福を追求して、閉鎖的な教団の中で外界と隔離した絶望的生活を営むカルト集団で、上述のような反社会、反文明的事件が起こるのは決して偶然ではない。

また、健全な宗教信仰というのは精神生活を「浄化」し、社会安定にある程度役割を果たすと思われるが、価値多元化を主張する現代社会で一部の青年層は、特定の宗教には「無関心」で自己中心的に信仰生活に執着する傾向をも見せている。これは、物質生活の豊かさに伴い、家族離れ、社会離れと同時に進んでいる現代宗教ブームの中で「個人隔離型」という割に普遍的な現象の一つでもある。

中国の場合、こういう人を文化キリスト教者、個人望教者などとも呼ぶ。これは、特定の教団に所属して活動することに興味を持っていた過去の宗教ブームとは違う新しい現象であろう。歴史上、日本社会でも同様な現象が起こっていたと指摘されている。たとえば、昭和二十二年の世論調査では宗教を「信ずる」と答えた人は71.2%、「信じない」と答えた人は22.1%であったが、昭和四十七年に行われた「世界青年の意識調査」では「無関心」が74%、約八割が宗教に対して否定的な態度を表明している¹⁾。宗教そのものが個人化して生き続けている証拠であるという傾向だと指摘する学者が多い。中国の場合でも、一億以上の信教者の中に約3分の1は青年であるが、上述のように宗教に「無関心」だと言いながら、自分なりに信仰傾向を見せる青年が一部現れている。

結び： 宗教の未来について

二十一世紀に入って、人類文明は大きな転換期を迎えている。これまで人類は文明を創造し、それとともに文明に創造されてきたが、文明を創造してきた人間の心が今日ほど議論の焦点になり、大きな社会問題となるとは思いもよらなかったことだろう。心の問題を論じるに当たり、宗教の問題を避けることはできまい。そして、最近頻発する国際紛争とテロ事件などは、その背景に宗教が少なからずかかわっていることは否定するわけにはいくまい。地域社会、グローバル化時代を迎えている国際社会の新たな秩序づくりに向けて、宗教乃至「宗教ブーム」のあり方とゆくえについて新たに検討する必要を強く感じざるを得ない。

本論の冒頭で提起したように、まず宗教ブームを考察するにおいて、歴史意識を持って、すなわち人類史発展の現代化とグローバル化という大背景の中で、孤立的ではなく、弁証的に、静止的ではなく、動的に、単なる宗教学的ではなく、学際的な研究によってその原因を探って理性的に対処すべきだと思う。

次に、教育の役割が重んじられなければならない。学校教育、社会教育及びメディアによる人間の健全な精神生活、健全な信仰に対する幅広い知識や道徳性レベルアップ及び心理的調整が必要である。特に、教育は宗教ブームの中で信仰個人化傾向を示している青年層には積極的な意味をもつものと思われる。宗教信仰の個人化によって社会公德の衰微が懸念されるからである。

そして、社会においてはこれまで完備的でない宗教法に対する整えが何よりいちはやく行われなければならない。この事業は宗教学者、法学者、政治家、以外に全社会の知恵を集めて一速く解決すべき問題である。これによって一般民衆の信仰自由という基本権利が保証されるし、それと同時にカルト集団の社会に対する挑戦と被害を有効に防止することができるからである。

更に、グローバル化が進む中で一個人の信仰問題が国際問題にまで繋がる傾向も出ている。宗教や「宗教ブーム」はもはや一国、一地域に限らない社会現象なので、国際的な学者たちの共同研究、各国関係組織による情報交流による

カルト防止の連携なども必要である。

宗教信仰は人間の精神生活と心理的欲求である以上、人類が存在する限り、その存在の合理性を否定することはできないだろう。新しい世紀に宗教が信仰者たちを健全で社会に有益な精神生活に導いていけば、心の「浄化」、社会安定、明るい社会づくり、ひいては新しい人類文明創造に積極的な貢献をするものであろう。

注

- 1) 阿部美哉『現代宗教の反近代性』P30

参考文献：

1. 『当代新興宗教』戴康生主編 東方出版社 一九九九年
2. 『当代仏教』楊曾文主編 東方出版社 一九九四年
3. 『論邪教』社会問題シリーズ編集委員会 広西人民出版社 二〇〇一年
4. 『民族衝突和宗教争端』楊景城、朱克柔 主編 人民出版社 一九九六年
5. 『現代宗教の反近代性』阿部美哉 玉川大学出版社 一九九六年
6. 『終末思想に夢中な人たち』ダミア・トンプソン著 渡会和子訳 翔泳社 一九九九年
7. 『ポストモダンの新宗教』島蘭進著 東京営出版 二〇〇一年
8. 『宗教の未来』日本未来学会編 東京書籍 一九九四年